

---

# ハードロック小説大全

古河 渚

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ハードロック小説大全

### 【Nコード】

N1396M

### 【作者名】

古河 渚

### 【あらすじ】

1960～70年代の、ブリティッシュハードロック、プログレッシブ・ロックに小説をイメージしてみました。各話は独立した短編（超短編）です。

ツエッペリン、ジェネシス、ピンク・フロイド、ジェフ・ベック、ウィッシュボーン・アッシュ、キャメル、キング・クリムゾン、ユライア・ヒープなどに興味のある方、曲に興味がなくても純粋に恋愛小説を読みたいという方も楽しめますので、是非お立ち寄りください。

THANK YOU

THANK YOU

「どうしたのよ、急に呼び出して」

「どう、勉強は順調…、受験まであと半年くらいか。あのさー、この前勉強教えてって言ってたじゃん。でも優子は私立の文系志望だし、数学とか物理とか必要ないんじゃないかって」

「ちがうよー。一緒にいたかっただけ、尚ちゃんの部屋でさ。だから口実だよ」

「なあ優子、俺、正直に言いたいんだ…、俺はお前を嫌いになることができないから、お前から嫌いになつてほしい。俺…、先週クラスメートの女の子と軽井沢に行ったんだ。一泊で…、ほら、週末会えないって言っただろ」

「私…、尚之を嫌いになるなんてできないから…、でも、尚之が私を嫌いになったのなら別れてもいいから…」

「ごめん…、俺、そのクラスメートの子と付き合いたいんだ。だから…、別れてほしい」

「だめよ…、ちゃんと私を嫌いになつたって言って…、それを私に聞かせてよ」

「そうだな…、俺は優子が好きじゃなくなった…」

「本当なんだよね、尚之…、さようなら」

「こんにちは…、尚ちゃん…、石坂さん…」

「誰…、ごめん…、いま眠ってたから…、まだ目が開かないんだ」

「私よ、矢崎優子。急にきてごめんね…。友達から聞いたのよ。尚ちゃんが大学をずっと休んでるって…、病気で入院してるって…」

「俺を嫌いになるって約束したじゃないか」

「ちがう、そんな約束してないよ…、尚之がウソをついたからよ…、私にウソをついたから…」

「……」

「ねえ、今日はすごく寒いよ。夜雪になるんだって…。ねえ、毎日ここに来て勉強してもいいでしょ…。私そうしたいのよ」

「なあ、優子…。俺はお前と未来の話ができないから…、別れることが幸せなんだ」

「私は直之と一緒にいたいから、ここに来ることが幸せなのよ」

「優子、毎日来てくれて…。ありがとう…。意識が無くなって話ができなくなる前に頼みがあるんだ」

「うん、言って…。来週から試験でしばらく来れなくなるからさ、何でも聞いてあげるよ」

「俺が死んだら…。葬式の後の出棺の時に…。かけてほしい曲がある…。ツエッペリンの曲なんだ。俺の…。俺の気持ちだから…。優子に聞いてほしい」

「うん、聞かせて…。尚ちゃん…。少し眠りなよ。私ここにいるから」

「尚之、受かったよ、青学の英文科。春からは…。春からは…。尚ちゃんの後輩なんだよ…。ねえ…。聞いているの…。尚之…。尚之…」

その日、尚之と約束した曲を聞きながら手紙を読んだ。

夜明け前の尾根にたち、海を見渡した。

薄色の満月が西の水平線に沈んでいく。

新しい太陽は昇るだろうか…

もし、太陽が昇らなくても、

僕の愛は滅びない。

君は僕の全てで、唯一人の女なんだ。

小さな微笑み、痛みの囁き、愛ゆえの涙さえ過ぎ行く日々消え去って

行く。

じゃあ、またいつか会おうぜ、優子。ありがとう、優子。

澄みきった大気の中で青い空を見上げた時、彼の顔が微笑んでいるような気がした。

## Supper、s Ready

僕が一目惚れをした女の子は同じクラスにいた。僕等の高校は県内有数の進学校で、彼女は中でも学年一二を争う才媛だった。特に英語は抜群にでき、そして、ジェネシスのファンだった。

ふーん、分詞構文か。僕はそのとき英文法の参考書を開いていた。参考書には『時・理由・条件などの副詞節と同じような意味に用いられる…』と書いてあり、僕は辞書を見ながら訳をつくり紙に書いた。でも、できあがった訳は、なんだか奇妙な感じがした。

『目と目が近接して、私たちの体は融け合ってゆく。』

月が明るく輝いているらしい庭の外では、6人の聖なる布に包まれた男達が芝生を

ゆっくりと横切り、7人目は十字架を手に高く掲げている。

ねえ、夜食の準備ができたのよ。

あなたは知っているのかしら？ 私たちの愛は真実なのよ。』

これはいったいどういう状況なのだろう。

たぶん、これは月明かりの強い夏の夜だ。全ての窓を開け放して、ベットの上で融け合っている男女がいる。でも、体が融け合うほど愛し合っているのに、その最中でさえ「夜食の準備ができた」と行為を中断させる女。まるで、「愛の本質は夜食にある」とでも言いたげだ。

それに、夜の帳の中で愛し合う男女に全く無関心な男達、十字架をかかっているのだからキリスト教徒なのだろうか。

ああ、まったく奇妙でナンセンスだ。デ・キリコの油絵「通りの神秘と憂愁」を初めて見たときのような衝撃的な不安を感じるのに、でも、なぜか僕の心はそれに出会ったのを長い間待っていたかのよう

に満たされている。

僕は片思いの女の子に手紙を書く。

『奈理沙…、奈理沙…、月が昇る前に僕は夜食をつくるだろう。そう、僕は君のためだけに夜食をつくる。』

世界中にどんな大事件が起っても、僕はそれを止めないのだ。ねえ、君は知っているだろうか。月明かりでの夜食こそ真実の愛だということを。』

かなり日数がすぎてから、薄い事務的な封筒で返事がきた。

『ねえ、こんな形而上学的ラブレターなんか、くそみたいよ。「愛している、やらせてほしい」って書けばよかったのに。でも、いいわ。私、あなたの作った夜食、食べてあげる。』

そんな内容の手紙を読みながら、彼女の好きな S u p p e r、  
S R e a d y を聞いた。

## Echoes

「ねえ、プログレって暗いわね。なんか聞いてると気分が憂鬱になつてくるわ」と彼女は言った。

そう、その時、僕たちは車でピンクフロイドを聞いていた。いや、聞いていたというよりも、僕が彼女に無理やり聞かせていた、というほうが近いだろう。

「うん、結構暗い感じはするよ。たぶん、それは、天気と関係があるのかもしれないね。ほら、イギリスに立ちこめる、いつも霧がかかったような暗い感じの曇り空がプログレを生み出しているからじゃないかな」

そうは言ったが、ロンドンもイギリスも行ったことは無かった。

「じゃー、なんで日本人は好きなのかしら？」

「さあ。でも、カリフォルニアとか、フランスのニースとかエーゲ海とか、そんな太陽燦々の場所では生まれないと思う。日本だって一年中じゃないけど、梅雨やら冬には雪にとざされたりで、部分的にはプログレ的気候なんだと思うよ」

そんな話をしながら交差点で信号待ちをしていた。前の車は、シヤコタンの暴走族仕様の車だった。僕はよせばいいのに、一つ前の信号でこの暴走仕様車と、スタートを競ったのだ。僕のロータリーエンジンは普通車だった。僕はスタートダッシュの後で、暴走族仕様車はエンジン音がでかいだけで、僕の前には出ることができないことを確認して、それからアクセルを緩めたのだ。

僕を抜き去った後でも気分が悪かったのだろう。運転席からミラーグラスをかけた若い兄ちゃんが降りて来た。僕を睨んでいるようだ。そして、数歩こつちに歩いて来た時、助手席にいた私の相棒は、口に手を当て、まるで魂でも引き抜いたかの動作をすると、その丸めた右の手のひらを男に向かって投げつけた。何も飛び出さなかったが、急に男は振り返り、車に戻っていった。まもなくして、暴走



仕様車もロータリーエンジンも共に発車した。

「ねえ、何をやったの？」

「えっ、私、魔法を使ってみたのよ」

と彼女は微笑みながら言った。

「ふーん、どんな？」

「言葉よ。言葉。魔法は言葉から生じるの。『私は忙しい、早く行かなくちゃ』って言葉をあいつに貼付けたのよ」

「すごい技だね」

「そうよ。ねえ、読んだ事あるでしょ？ ジョジョの奇妙な冒険、あれに出てくるじゃない。コウイチ君だったかな…、あの能力をまねしてみたの」

「ああ、思い出したよ。確か、エコーズだったね」

それは今聞いていたピンク・フロイドの神秘的な曲だった。

## 哀しみの恋人達

この世界では、生身の人間とそっくりなアンドロイドが存在した。僕が購入した彼女は、たぶん21世紀なら数千万円はしただろう。夏のある日に、彼女は自分自身の使用マニュアルを手にもって、僕の前に現れた。マニュアルは分厚く、最初のページには、CPU：20GHz×16、メインメモリ：256PBベタバイトと記載があった。昔の新聞なら、たぶん数百万年分は記憶できるのだらう。

でも、そんなことはどうでもよかった。マニュアルの最後のページには、メモリーの完全消去方法について、との記載があった。

「購入者様が、本アンドロイドの記憶を完全に消去する方法です。これを実行した後では、メモリー内の記憶のみならず、全てのシステムプログラムも消去されます。アンドロイドは、完全に機能を停止し、修復はできません」

と書かれており、その完全消去プログラムの起動方法が記載されていた。もちろん、僕以外にそれを起動することはできない。

ご主人様、つまり私の彼と一緒に死んで欲しいって言ったとき、私は素直に「うん」とは言えなかった。私達アンドロイドはご主人様を守護するようにプログラムされているからだ。でも、彼の希望を叶えるように協力することにもなっている。私はある提案をした。そして、今夜はそれを実行する夜だった。

「ねえ、ここに4個のカプセルがあるわ。これを2個ずつ飲むのよ」私は4個のまったく同じに見えるカプセルを差し出した。

「この中の2個は猛毒が入っていて、2個は速効性の睡眠薬が入っているの。毒のカプセルは2重になってるから溶けるまで時間がかかるのよ。つまり、二人とも眠ってしまえば二人そろって旅立てる

わ。でも、一人が寝て、一人が起きている状態になったとしたら、起きているほうが死ぬのよ」

「どうして、そんな込み入ったことをやらなきゃいけないんだ？」

「そーね、神様の意志を確かめたいのよ。一緒に死ねというのならば、私はそれを受け入れるわ。でも、あなただけが死ぬかもしれないし、私だけが死ぬかもしれない。もし、そうなったならば、それは神様の意志なのよ。生き残ったほうは、それを受け入れて生きなければならぬの。ねえ、約束して、もし、あなたが生き残ったとしたら、あなたは寿命が尽きるまで自ら命を絶たないって」

「ああ、絶対に約束する」

「それを聞いて安心したわ。ねえ、一緒に死ねる確率は三分の二、あなたが死ぬ確率は六分の五、あなただけが生き残る確率は六分の一よ」

「一緒に死ねない確率も三分の一か」

念のため言うておくが、このアンドロイドは生体クローン技術と超高速大容量バイオチップ技術が融合されてできている。つまり、生体は普通の人間と同質であり、毒を飲めば死ぬに違いなかった。そして、当たり前だが、二人が共に生き残る確率はゼロだった。

カプセルを飲む前に僕は大好きなジェフ・ベックのバラードをかけた。その曲を聞きながら逝きたかったからだ。

「ねえ、スミレ。もし、二人とも生き残ったなら、僕と結婚してほしいんだ」

「ええ、いいわ。あなたの好きな場所で…、あなたの選んだウェディングドレスを着て、そして二人だけで結婚式をしましょう」

僕がどんなに彼女を愛していたとしても、いままで彼女に結婚を申し込んだことはなかった。なぜなら、僕のプロポーズを受け入れることで、機能停止プログラムが始動するように、僕が設定していたからだ。

僕は、すばやく4個のカプセルを奪い取り、水なしで飲み込んだ。

遠のく意識の中で「哀しみの恋人たち」の悲しげなギターの音が聞こえていた。

僕は病院で目覚めた。

「あなた、睡眠薬を4つも飲んだのよ。あなたの相棒が連絡してくれたのでなんとか助かったの」

と、看護師が教えてくれた。

「それで、それで彼女は怎么样了？ たんですか？」

「残念ね。私達が到着した時には…、機能が停止していたわ」

ああ、なんてことだろう。彼女は最初から僕を殺す気なんかなかったのだ。だから、いっしょに結婚すると言ったのだ。

涙があふれ僕は泣いた。それは、あのギターの音に似ていたに違いない。

## 永遠の女神

そのころ僕は中一だった。ウィツシュボーン・アツシュの「永遠の女神」を聞いて、曲の出だしから引き込まれていた。こんなに美しい曲がロックなのだろうか？ マンドリンとギターの絡みを聞きながら、一年前の運動会のことを考えていた。

それは、自分の学校ではなく、隣の学校の運動会だった。初めて、自分の学校以外の運動会を見に行ったのだが、何故そんなことをしたのか、理由はよく覚えていなかった。きつと暇でやることがなかったからだろう。友達もさそわずに一人で自転車で行って正門をくぐると、六年生が出番を待って列を作っていた。小学生は学年で身長がきれいに分かれるので、その集団が六年だということはすぐに判った。僕より身長の大きな男女がいたからである。

自転車から降りて、その集団をなにげなく眺めているとき、一人の少女から目が離せなくなっていた、強い電流が流れて体が硬直したかのようなだった。その子はすでの背が高くすらつとしており、鉢巻をしたショートヘアの顔は小さめできりつとしており、脚は長くまっすぐでしなやかに見えた。なんて素敵な子なんだろう、その子が行ってしまうまで、ずっと眼を離すことができなかった。

一目惚れは初めてのことだった。僕はその場に彼女が帰ってくるかもしれないと思いしばらく待っていたが、その子は戻ってこなかった。

帰りの自転車では、僕の心はいままでに体験したことのない、軽い疼きのような痛みを感じていた。見上げると、青空に浮かんだ秋の太陽が南中しようとしている。僕は真っ直ぐ家に帰ることをやめ、ときどき行っていた田んぼや森のある方角に向かっていった。

僕は見たことのない場所に出た。そこは、広い広い空間なのに人

工物は一つで、それはそれほど高さはなく凝灰岩でできた長い石塀だった。南から来た塀と西からきた塀は僕の前で結合して終了していたが、両端ともどこまで続いているのか？ 終わりがあるのか？ 確認できなかった。その構造物が地面の上にあったのか、それとも白い石ただみに上に在ったのかさえ、もう覚えてはいない。

僕は前に通ったことのある刑務所の前にいて、これはその塀なのか思ったが、明らかに低いし、刑務所の塀はコンクリートだったことを思い出した。僕の頭くらいの高さの塀の内側は見えなかったけれど、その高さならば手についてジャンプすれば上に乗れそうだと思うた。

自転車から降りて僕がその上に飛び乗ると、その先には地平線までつづく砂浜が広がっていて、その砂浜で誰かが僕の方角を見つめていた。僕はなぜかその誰かに会いたくて、凝灰岩の塀から砂浜に飛び降りて歩き出した。それほど遠くはないと思ったのは間違いでかなり歩いたような気がした。そして、僕の心臓の鼓動と呼吸は荒くなってきたが、それは長い距離が原因ではなくて、僕の目に映る姿がはつきりしだしたからだ。それは名前もわからない、さつき見た少女に間違いなかった。

『私達、会ってしまったのね』

鈴のような少女の声が聞こえたが、本当に聞こえたのかわからなかった。

「いや、今初めてじゃない。さつき会ったと思うんだ」と僕は言った。

「うつん違うわ。はじめてよ」

「でも僕は、君の顔や髪の色それに足の形だって正確に覚えている。ただ、名前を知らない。それと君の声を聴くのが初めてだ、もしよかったら、まず君の名前を覚えてほしい」

彼女は、しばらく無反応で何かを考えているようだった。

「さつき会ったのはあなたの影よ。わたしとは違うのよ」

少女は僕の質問には答えなかった。

「さつき小学校の校庭で見かけた女の子は生きていて実際に走っていたし…、君はその女の子によく似ていると思う」

僕は胸の形が違うように思ったのだが、それは言わなかった。

「あなたにはまだ理解できないことがたくさんあるのよ」

少しの静寂のあと少女は言った。

「でも、あなたは知りたいのね」

「ああ、どうしても知りたいんだ」

僕の目の前にいる少女は小学校で見かけたあの子と同じ子なのだろうか？ 『そう、たぶん彼女に違いない』と思っていた。そして目の前の少女は微笑んでいた。それは微妙な微笑であっただけ僕にはまぶしかった。太陽は、まだ南中していた。

「わたしはあなたよ。そしてあなたはわたし。正確には…、わたしはあなたから分離してできた存在なの」

と少女は言った。

「分離？」

「そうよ、分離、今は縮退がほどけて分離しているの。そして、その分離の原因になっている微小な場を作っているのはあなた自身の影よ」

「縮退がほどけている？」

僕は縮退の意味が判らなかった。

「ここで出会ってしまったならば、もう二つの道しかないわ。わたしと二人であの地平線のはてまで歩くのよ」

と少女は言った。

「でも、どのくらい距離があるんだか、それにどのくらい時間がかかるのかわからない。それに、君と後どのくらい一緒にいられるのかも…」

「それは意思なの、あなたがそれを望めばいいだけよ。それで私達の分離は解消されるのよ」

僕は彼女と地平の果てまで行きたかった。それは僕が最高に望ん

でいたものに違いないと確信できた。

If you kiss me forever,  
I'll be forever yours, . . .

気が付くと、僕は彼女の腕の中に抱かれていて甘い香りが鼻腔を包んでいた。

「もうひとつの道って？」

彼女は長い間答えなかった。ああ、やっぱり見間違いだっただのか、彼女にはやわらかい胸のふくらみがある。とても、とても、やわらかい…。

僕は彼女の胸で眠りたかった。そしてまどろみの中で、遠くに女神の声を聞いたような気がした。

「影に会いたいのなら塀を戻るのよ。それがあなたの望みならば…」  
僕は薄いタオルケットを両足に挟んで眠っていた。股間は固く、その芯には甘い疼きが絡み付いていた。



## 古い記憶の井戸に入る - I

ハードロックやプログレッシブ・ロックを定義したり解説したりすることは難しいので、ここでは勝手な思い込みと、自分中心な思い出語りを書いていただけです。ということ、まずお断りしておきます。短編中の曲を聞きたいという方もいらっしゃるかもしれないので、どのアルバム（CD）に入っているのかを記しておこうと思います。この超短編集のテーマとなる曲は1965年から1975年くらいの10年間に発表されたものがほとんどです。まだ書いている途中なので、ほとんどになる予定です、と言つのが正しいです。

古い曲が多いので聞かれるのは大変でしょうが、大きなレンタル店などに行けば出会える可能性は高いと思います。

### 『THANK YOU』

これはハードロックの帝王「Led Zeppelin」のセカンドアルバム（Led Zeppelin II, 1969）の作品です。

レッド・ツェッペリンを初めて聞いたのはラジオでした。当時、「移民の歌」とか「ロックンロール」とかのシングルカットされた曲がラジオで流れていたのですが、ハッキリって面白いとは思いませんでした。でも、当時、ツェッペリンいち押しDJの渋谷陽一氏が「天国への階段」（IVの作品）を毎日褒めたたえていたので「天国への階段」を聞いてみたいとの興味はありました。

しかし、私が聞くようになった直接のきっかけは、ラジオで聞いたデビューアルバム（I）のオープニング曲「Good time

s bad times」にノックアウトされたからです。それなのに、天の邪鬼な私はIでもIVでもなくてIIを買いました。結論から言えば、私はツエッペリンが好きになり、あの長髪とパンタロンをなびかせた天才ギタリスト、ジミー・ペイジは私の神になり、私はツエッペリン教団の一員になりました。

『THANK YOU』は、ツエッペリンではかなりめずらしい静かなバラードです。一説では、もう一人の天才つまりボーカリストのロバート・プラントが奥さんに捧げた愛の曲だとのこと。ツエッペリンは、でかい音をだして世間に不満をぶちまけるロックスターとは別次元でした。彼等の作品には、神話の世界や精神世界と繋がりを持とうとしていたものがあることは確かだと思います。

## 『Supper's Ready』

プログレッシヴ・ロックバンドとは何か？ よくわからないけど、漠然と次のようなイメージがあります。箇条書きにすると

- 1．クラシックやジャズをベースにした超絶テクニクを有する。
- 2．歌詞が難解で、言い回しがくどかったり、何を言いたいのかわく解らない。
- 3．奇人、変人のたぐいが何人かいる。
- 4．伝説のライブをやることができる。
- 5．1曲が20分程度の大作を発表している。
- 6．アルバムジャケットが凝っている。まるで、キュービズムやフォービズムやシュールレアリズムの画家が書いたような感じである。

と、こんな感じになるんじゃないでしょうか？

一般的なプログレ5大バンド（キング・クリムゾン、ピンク・フロイド、イエス、ELP、ジェネシス）が1〜5の全てを満足するわけではありませんが、たぶん、初期のジェネシスは6つの要素をすべて満足していると思います。

『Supper, s Ready』はアルバム「Fox trot : 邦題「フォクストロット」, 1972」に収められた20分を越える大作で、それを歌い上げるのは、奇人ピーター・ガブリエルでありました。過去形なのは、その後数作のアルバムを発表した後で、ボーカルはドラマーだったフィル・コリンズに変わったからです。

フィル・コリンズのジェネシスはポップになり世界的になり商業的には成功しましたが（フジTV8:00の小倉氏の番組オープニングの曲）、プログレ6箇条のいくつかは喪失してしまったような気がします。

プログレ界に大きな足跡を残したのは、ピーター・ガブリエルのジェネシスなのでしょう。この頃のジェネシスの曲は、私に中世的世界観をイメージさせるのですが、それが最後になったアルバムは「静寂の嵐」だったような気がします。

「フォクストロット」のジャケットは、きつねのような顔をした女が川の水面に立っているという奇妙なものでした。

## 『Echoes』

私の大好きな漫画に「ジョジョの奇妙な冒険」があります。ここでは、人間の持つ精神力が一種具現化した「スタンド」と呼ばれる特殊能力が現れて、このスタンドと敵スタンドとの間でバトルが展開するという画期的な設定で物語が進んでいきます。

各人のスタンドには名前（固有名詞）がついているのですが、こ

これらのほとんどが、ロックバンド名やプログレッシブ・ロックの曲名です。この中で、ピンク・フロイド由来のものは「クレイジー・ダイヤモンド」と『エコーズ』があったような気がします。

『エコーズ』はアルバム「Middle」：邦題「おせっかい」1971」に収録されている大作曲で、曲のオープニングは宇宙とのコンタクトを求める人類？ みたいな感じで始まります。途中はまるで未知の宇宙生命体、いや神との遭遇を求めて宇宙空間を突き進んでいく意志みたいなものが感じられます（個人的に）。

私がこのアルバムを買ったのは、当時はやっていたプロレスの影響です。このころリング上で額から血を流す奇怪なレスラーがいましました。「アブドラー・ザ・ブッチャー」です。魔法使いが履くような先がクルリと1回転したようなブーツをはき、眼をむき出して悪魔のような奇声をあげるブッチャーは、たいてい最後には自らが用意したフォークやナイフで額を割られて血だらけになりました。

私は、この異世界から来たようなブッチャーを見るのが好きでした。そのブッチャーの入場行進曲がピンク・フロイドの「吹けよ風・呼べよ嵐」という不気味な曲でした。そうして、その曲を聞くためにアルバム「Middle」：邦題「おせっかい」を買ったのでした。

## 『哀しみの恋人達』

1960年代後半、私の個人的なギターの神様であるジミー・ペイジと、ギターの神様に愛された男ジェフ・ベックは、同じバンドに在籍していました。そして、二人は同じようなロックバンドの構成アイデアを持っていたようです。強力なリフと切り裂くようなリードギター、そのギターに引けを取らない強烈なボーカル、そして微動だせず強力に鼓動を供給できるリズムセクションです。

そのアイデアに一步先んじたのは、天才ボーカリスト、ロバート・プラントを発掘したページであり、レッド・ツェッペリンでした。ジェフ・ベックも、希代のボーカリスト、ロッド・スチュワートを得「ジェフベック・グループ」また、最強のリズム隊と組んだベック・ボガード&アピスで対抗したのですが、残念ながら一敗地にまみれたと言わざるをえないでしょう。

でも、ギターの神様はジェフ・ベックを愛していたのです。彼の真骨頂はソロ活動を始めてから現れます。バンドマネジメントなどの煩わしさから離れた彼は、優秀なジャズ系のミュージシャンと組み、超ハイレベルな作品を次々に発表していきます。後にクロスオーバーとかフュージョンというカテゴリーとして発表される曲分野において、先駆者の一人となったのです。

『哀しみの恋人達』はアルバム「BLOW BY BLOW : 邦題「ブLOW・バイ・ブLOW」 1975」に収録されている曲です。私は彼のドライヴ感たっぷりのギターも好きですが、この頃の二つのバラード『哀しみの恋人達』と『Love is Green』が最も好きです。聞いているとなんだか泣けてきます。

### 『永遠の女神』

この頃のロックやプログレバンドには、ヨーロッパの中世を想起させる曲を発表しているグループがいくつかありました。もちろん、当時ヨーロッパに行ったことはなかったし、ましては中世ヨーロッパがどんなものか知る由もないではありませんが、とにかく、そんな感じがしたのです。

そのようなバンドとしては、初期のジェネシスがありますが、ウィッシュボーン・アッシュもそんな雰囲気バンドでした。また、彼等は4人のメンバー中リードギターが二人いるという、ツインリ

ードの先駆的バンドとしても有名でした。

『永遠の女神』はアルバム「There's the Rub : 邦題「永遠の不安」1974」に収録されている曲です。ちょうど、一人のリードギタリストが交代したところで、彼等の中世的曲想がどのように変化するかが注目されていました。この曲はアメリカンなドライブ感を重視する新しいギタリストと、古い中世的世界にこだわるギタリストとの絶妙なバランスに成り立ったもので、奇跡的に美しい曲でした。

私にはこれが唯一で、その後この絶妙なバランスは実現できなかったように思います。

もちろん、このアルバム以前に発表されちた、中世を醸し出す曲群は秀逸であり、私の大好きなバンドでした。

## NimrodのThe White Rider

俺はバイクで佐渡島を目指していた。つい一ヶ月前に中型免許を取得したばかりで、この400ccのヤマハも先週購入したばかりだ。まあ、とにかく碧い碧い、日本海が見たくなって、この糞暑いお盆休みに関越高速を飛ばしているという訳だ。

まだ初心者だからというわけでもないが、俺は時速100〜120くらいでゆったりと走っていた。

アクセルスロットを吹かしながら、俺の頭に響いていたのは、昨夜一晩中聞いていたキャメルのNimrodだった。その最後の3分ぐらいを占めるギターとベースの絡み合いが頭の中で渦まいていた。

気がつくと、俺の横を猛スピードで赤いバイクが追い抜いていた。

「野郎、飛ばし過ぎだぜ。たぶん150は出てるよな」

そんな感想が頭をよぎったが、まあ、それともうでもいいことだった。

しばらく走らせてから、俺のバイクは赤城高原のパーキングに入っていた。

バイクの駐車スペースには、あの赤いバイクが停まっていた。そしてその横で、赤いヘルメットを脱いで、座ってコーラを飲んでいった。女だった。

髪は長くて、今は風にそよがせている。i-podで何かを聞いているようだった。とても美しい顔立ちで、そしてスタイルも良かった。

「よう、はじめまして」

と俺は言ったのだが、彼女にはよく聞こえなかったようだ。そして、それから、彼女はイヤホンを抜いた。

「よう、はじめまして。俺さっきお前にすごいスピードで抜かれたんだ。ちよつと出し過ぎじゃない」

「ふーん、そう。それで。それで、何か用？」

「いや、別に用はないけど」

「そう、じゃあ、もういいんだろー」

いつもなら引き下がるのに、この時はもう一押しした。

「なあ、どこまで行くの？ 俺は佐渡島を目指してんだけど、もし一人なら途中まで一緒に走らないか？」

彼女は不思議そうな顔をして俺を見上げた。

「佐渡島？ へえ、いつしよじゃん。でも、一緒には走りたくないよ。めんどくさいし、だいいち、お前私について来れないだろー」  
「大丈夫さ、さっきはキャメルの曲が頭に渦巻いていたから、ゆっくり走ってたんだ」

彼女はますます不思議そうな顔をした。

「キャメル？ キャメルって？」

「タバコじゃないよ。俺の好きなロックバンドさ」

「ふーん。じゃあ、このキャメルなんだ？」

彼女はおもむろに、ライダースーツの上を脱いでＴ・シャツ姿になった。

汗まみれのＴ・シャツの背中には Camel の文字と、ラクダの絵柄が着いていた。それは、昨日聞いていたＣＤジャケットとまったく同じものだった。

今、俺のアパートの駐車スペースには二台のバイクが停まっている。俺の黒のヤマハ４００と彼女の赤のホンダ７５０だ。俺たちは佐渡から帰ってからしばらくして、付き合うようになった。

そして、二人でキャメルのアルバム「ミラージュ」を聞いている。俺は何回か「結婚しよう」と言ったのだが、彼女の答えはいつも一緒で、「お前が、私に追いつけるようになったら考える」だった。という訳で、まだ結婚はできないけど、俺はキャメルに感謝して



いる。

そして、どうかこの出会いが、蜃気楼のような幻ではないことを祈っている。

## Epitaph (墓碑銘)

私は恋がそれほどまでに苦しいものだとは知らなかった。

でも、生きていれば一筋の光もない真の闇に遭遇することだってある。でも、そのときは、そんな風には思えなかった。ただ、ただ、自分を消してしまいたい、死んでしまいたいとだけ考えていた。

私は妊娠していて、そして彼は「降ろせ」生むならば別れると言った。

私が死の淵に沈まなくてすんだのは、占い館のうらぶれた個室のおかげだった。そして、そこでタロットを使う占い師に会った。

私が事情を話すと、しばらくして、おじいさんの占い師は不思議な話を始めた。

「娘さん、今から約八百年前に、あなたを殺したのは私です。私たちは親子だったのですよ。そのとき、私にはあなたを剣で刺し殺すしかなかったのです…。不思議ですね。娘にまた会えるとは思いませんでした」

「それは不思議な話ですけど。それより、私は、私はどうすればいいのですか？」

「そう、その話です。あなたの彼はそのとき十字軍の兵士でした。命令で私たちの立て籠る要塞都市に攻め込んだのですよ」

「彼が…、ですか？」

「ええ、私を刺し殺したのが彼で、その時には、あなたも、私の妻も息子もすでに私の傍らで、こと切れていました。あなたはまだ十四歳で美しい娘でした。いま起きていることは、そのときの事と関係があるのですよ」

「そんな。彼が私の父を殺した兵士で、一家が…、私が死んだのも、その兵士のせいだと…」

「ええ」

「でも、なんで、みんな降伏をしなかったのですか？ 降伏すれば殺されずにすんだかも」

老人はとても哀しそうな表情を顔に浮かべ、頭を左右に振った。

「あなたは死を選ぶうとしていますね？ でも、あなたが私の元を訪れたのは必然なんですよ。全てのカルマを清算しなくてはならないんです。私にはあなたの命を救うというカルマが。あなたには生き続けるというカルマが。そして、彼には死ではなくて生命を与えるというカルマが」

「どうすればいいんですか？ 私はもう死にたいんです」

「死ぬのを一日だけ延ばして、今夜はこの紙を彼にみせて、今日の私からの話を彼にしてください。なにも起らなければしかたがないです」

私は彼のマンションに向かった。玄関の鍵をあけて部屋に入ると、彼は何かの曲を聞いていた。フルートの音が美しいおだやかな曲だった。

私はだまって、彼に紙が入った封筒を差し出した。そこに何が書いてあるのかを知らなかった。

ああ、私には聞こえる

殺せ、殺せ、皆殺しにせよ。一人も生かして残すな

神の下僕は神自身がお見分けになられる

ああ、予言は成就した

死の器具が朝日に輝くときに  
街に静寂がおとずれる

ああ、君よ

娘のために、墓碑銘を立てよ

このベジエのために

君自身のために

彼は、読み終わると、泣き崩れた。

押し殺したような嗚咽の中で、静かだった曲はおわり、鎮魂歌のよ  
うな重苦しい曲になっていた。

あのときの曲がキング・クリムゾンのE p i t a p h（墓碑銘）  
だったということを、ずっと後で聞いた。私たちに二人の子供が生  
まれたあのことだった。

## 肉食鳥

俺と麻美は海に泳ぎに行った帰りで、彼女の運転で有料道路を飛ばしていた。真夏の昼下がりは気怠かった。

麻美は変わった職業に就いていたが、その仕事を薦めたのは俺だった。彼女は大学を卒業して銀行に勤めていたのだが、つまらないといって辞めた後でも定職につかず俺の部屋でブラブラしていた。だから、いかがわしいエロ雑誌のSM嬢募集の広告をみせて「行ってみたら採用されるかもよ」と薦めたのだ。

彼女は今や高級SM店のNo.1女王らしい。もともと身長が高く細身でプロポーションもいいから、つまり、SM嬢のボンデースタイルがよく似合う。本人いわく、そういうスタイルに変身すると性格まで変わることだった。

「ねえ、陽介。この仕事って私の天職かもよ」

「ふーん、そんなに面白いのか？ その仕事」

「うん、面白いよ。男の人ってみんな可愛いもの」

「可愛い？ どう可愛いんだよ？」

「そうね。まあ、私の所に来るのはもういい歳のオヤジが多いんだけど。まあ、お金はあるし、社会的な地位だって高い人が多いの。でもね、そんなオヤジたちが、縛って鞭でたたいてくれとか、ヒールで踏みつけてほしいとか真剣に頼むのよ」

「まあ、それが好きなんだからいいんじゃないか。高い金払ってまでするってほしいなんて、俺には理解できないけどさ」

「そうね。でも、世の中にはいろんな趣味の人がいて面白いのよ。普通の生活してたら、そんなの判らないじゃない、みんな自分を隠してるから。でもね、私のところにきたら、全てをまっさらにして魂の裏側まで曝け出すのよ」

「それで、どんな趣味のどんな変わり者がいるんだい？」

「変わり者じゃないってば、みんな同じよ。ただ隠してるだけで普通なの。例えばだけど、赤ちゃんのオムツやベビー服を着て哺乳瓶でミルクを飲ませてほしいとか、フリフリの女の子のドレスを着せてお尻を叩いてほしいとかいろいろよ」

「ド変態だな」

「でも、みんな本当に満足して、うつとりとした表情で帰っていくわ。だから、SMの女王様って癒し系の仕事なのよ」

「癒し系？ 鞭で叩いたり、蠟燭たらしたりするのが癒し系？」

「そうよ。だって私プレイルームに入る前に、お客様の要望を詳細に聞くもの。もう、ああしてくれ、こうしてくれ、痛いのは少なめにとか、激しく踏みつけてくれとか、もう要求を聞くのが大変なの」

彼女が運転する車は順調に流れていた。たぶん、あと数分で、道路沿いに立ち並ぶラブホテル群が見えてくるはずだ。

「ねえ、陽介、私とSMやろうよ。ほら、あそこのラブホテル、SM専用のプレイルームがあるのよ」

「えっ……」

「大丈夫よ。あなたの深層に潜んでいる欲望……私が溶かしてあげるわ」

彼女は俺のほうを見て優しく微笑んだ。

俺はこの瞬間を待っていたのかもしれない。いや、きっと待っていたのだろう。

「さあ、これからは女王様と呼ぶのよ。いいわね」

彼女は命令口調で言うと、CDを取り出して曲をかけた。

「これは、お店で流れる私のテーマ曲なの。お客様は個室でこの曲を聞きながら絶望に打ちひしがれて、私が現れるのを待っているのよ。だから、部屋に着くまでこの曲を流すわ」

曲は、ユーライア・ヒープの「肉食鳥」で、SMの女王に相応しい曲だった。

ああ、あの部屋で拘束されて腹の中まで食い破られるのだ。そし

て魂までも引きずり出されて曝される。

ホテルのゲートをくぐるとき、俺の股間は膨らんでいた。  
そこには絶望ではなく希望があるにちがいない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1396m/>

---

ハードロック小説大全

2010年10月9日16時53分発行